



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいております大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

歌川芳虎画

「東海道名所図會」に描かれた

幕末ころの金沢八景

歌川芳虎は歌川国芳門人の浮世絵師で、幕末期から明治時代中期にかけて活動しました。武者絵・役者絵・美人画のほか横浜絵や文明開化の風景画も多く描いてあります。この「東海道名所図會」は文久三年（一八六三年）の徳川家茂（十四代将軍）が上洛した時の行列の様子を題材に江戸から京都までの東海道の名所を描いたもので、長い東海道五十三次を曲がりくねった形で表現しながら十二枚にまとめたものです。

上図はその二枚目と三枚目の部分で、東海道の戸塚・藤沢・平塚の道筋よりも本牧沖に停泊する黒船を大きく描き、さらに杉田・能見堂・洲崎・野島から瀬戸明神・びわ嶋・六浦・金沢・夏島・えぼし島・さる島などを掲載してあります。東屋や千代本らしい建物も書き込まれていて、「金沢八景」が名所として著名な存在で、鎌倉や江ノ島とならんで、江戸の町人たちも訪れる行楽地であったことが伺えます。

大山も描かれてありますが、大山詣りの帰路に「金沢八景」を巡るといふ落語の「大山詣り」にみられる行程も、この絵図を見た人はたどってみたいくなる効果も生んだのかもしれませんが。

令和六年祭事暦

- 一月 一日 歳旦祭
- 鶏鳴神事
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二〇日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
- 神社本廳献幣使参向
- 琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 七日 天王祭出御祭
- 本社神輿御霊入・宮出渡御
- 七月 九日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 十四日 天王祭巡幸祭
- 天王神輿町内巡幸
- 七月 二一日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一三日 手子神社秋祭
- 無形文化財湯立て神楽
- 一一月 二三日 秋季大祭
- 新嘗祭
- 一二月 八日 歳の市
- 開運熊手授与
- 一二月 三二日 大祓式
- 大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭

古絵はがきに残された

金沢八景のいろいろ

浮世絵から絵はがきに

一面で東海道の名所の浮世絵に金沢八景が描かれてゐたことを紹介しましたが、明治時代後半から大正・昭和の時代になると絵はがきが名所案内の中心になります。

江戸時代の浮世絵をそのまま印刷したもの②や、白黒写真に彩色をして印刷したもの①⑤⑥も販売されます。

えぼし島があつた

ところで、江戸期の絵図には「夏島」と並んで、「えぼし島」が記載されてゐます。現在はこの「えぼし島」はありません。

大正の頃までの絵はがきにはこの「えぼし島」が写つてゐますが①②、昭和にはいった頃から、「えぼし島」は写らなくなりま



航空隊の飛行場が建設され、えぼし島は崩され平坦になっただけでなく、軍事的にこの地域の写真が許可されなくなったことによりま

一方で「乙舳帰帆」のはがきに複製飛行機が登場します③

昭和五年に湘南電気鉄道(現在の京浜急行)が開通し、「小泉夜雨」のはがきには電車が走る場面も表されます④

電鉄の開通により行楽客も増えて絵はがきの種類も増加してゐます。

江戸時代から続いた風景が近代化によって変化し始めたのが

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひます。仁治二年(一二四一)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたことせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拝殿を建築竣工して今日に至つてゐます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのっとりた湯立神楽が今も続けられてゐます。

この時期であつたのです。 大震災の影響も

風景の変化に影響を与へたものに大正一二年の関東大震災もありました。大震災直後に撮影されたと思はれる絵はがきには、震災時の被害が感じられる風景が残されます。

「瀬戸秋月」のはがき⑤は九覧亭から琵琶島や千代本を俯瞰した構図ですが、琵琶島の護岸の石垣が崩れてゐるやうに見えますし、千代本の建物には斜めに材木が立てかけられ補強されてゐる様子です。

瀬戸神社に残る震災後の琵琶



鳴神社復興棟札によると、本社背後の崖が崩れ右末社が埋没し、鳥居や石灯籠はみな倒壊したとのことで、琵琶島参道には幅四尺、長四十余間の亀裂が二本生じ、護岸はすべて崩壊したと記録されます。そして地域の人々の翼賛と氏子青年たちの労力奉仕もあって大正一四年の春祭までに復興できたとのことです。

同じ版組で販売された「称名晚鐘」のはがき⑥には、称名寺の鐘楼の建物がなく、釣り鐘が台座のうえに直置きされてゐる状態で写つてゐます。

これ以前の絵はがきでは茅葺き屋根の鐘楼でありましたが、

震災で倒壊したことがわかります。そして電車の写る「小泉夜雨」と同じ版組の絵はがき⑦では、銅板葺の立派な鐘楼となつて再建されてをります。

谷津町鎮座 浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の来訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まつた中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土日曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたといふことです。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にも信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教学人となり神奈川県社廳献幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行われました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣功しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后とられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれてゐます。

七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしゃいます。

二十周年を迎へる

横濱金澤七福神めぐり

金沢区内の七つの社寺と横濱金沢観光協会が協力して、お正月に「七福神めぐり」の参拝行事が催されるやうになって、令和六年は二十回目になります。

元旦から一月八日までが御開帳期間となり、最終日は横濱八景島も加はるスタンプラリーもあります。

琵琶嶋神社のある瀬戸神社は「弁財天」となりますが、その他の福神の寺社は以下のとおりです。

- 富岡八幡宮(蛭子尊)・長昌寺(布袋尊)・正法院(福祿寿)・寶蔵院(寿老人)・龍華寺(大黒天)・伝心寺(毘沙門天)



柳沢良平画
伯の七福神絵
馬も横濱金澤
七福神ならで
はの授与品で
です。

釜利谷町鎮座 手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとこの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守って行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されてゐます。

瀬戸神社 (一三三六〇〇七)

横濱市金沢区瀬戸十八ー十四

(電話)〇四五ー七〇一一九九九二

(FAX)〇四五ー七〇一一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>